

2016（平成 28）年度 京都大学 入試問題 理系 第 2 問 解答例

問一

中世ヨーロッパの人々には、空間を伝わる音声すべてを子細に聞き分ける、現代人より格段に鋭敏な能力があったので、個々の音声に必ず豊かな意味が認められたということ。

- * リード文ですでに注意喚起されているように、主題としての「中世のヨーロッパ社会で」のこととして、限定的に解答すること。
- * 「～ありえなかった」の置換説明なので、「すべて（必ず）……であった」といった全称表現の解答化を図る。

問二

写本は、文字を使用して情報を正確に蓄蔵し、時空を超えて伝達する通信手段である面と、それ自体、ひとつの芸術品である面とを不可分のものとして兼備していたということ。

- * 具体例のもととなる一般論・抽象論の内容（解答の必須要素・基本要素）に加えて、この具体例（写本）特有の意味まで問うのが京大水準である。基礎・応用の両面で答える。
- * 「細密挿画」「イニシャル文字の装飾」は具体例にすぎないので、解答に用いない。
- * 「分離できぬ一体となっていた」ことの意味を適切に置換説明すること。

問三

中世ヨーロッパでは、絵は文字と同様、情報を正確に蓄蔵し、時空を超えて伝達する通信用の手段であった。ほとんどの場合、画家は、絵そのものが対象を描写して鑑賞されるのではなく、明瞭な伝達内容を秘め、その意味が解読されるためのものとして、絵を描こうとしていたと考えられるから。

- * 否定構文タイプの傍線部であるから、その理由説明としても、否定構文の解答形式を採用すること。（必ず否定・肯定両面の解答内容を記すこと！）
- * 「（集中されていたのは）集中していたからである」といった、**トートロジータイプの解答ミスをしない**ように。置換ではなく、理由説明の述部表現をとる。傍線部「画家にとっての関心は～」に対応した、「画家は～（画家の意図・心理的理由）」で答える。